The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バンバラ語の自他交替と自動詞の特徴について ：「受動文」から考察する
Author(s)	小森, 淳子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2019, 30, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72916
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

バンバラ語の自他交替と自動詞の特徴について[1)]
―　「受動文」から考察する　―

小森　淳子

0. はじめに

バンバラ語（ニジェール・コンゴ語族、マンデ語派、マリ）の「受動文」は、典型的な受動文から外れる変則的なものである。典型的な受動文とは一般に、(1) のスワヒリ語（ニジェール・コンゴ語族、バントゥ諸語）の例のように、能動文の目的語が主語になり、動詞が受動形になる、という変化を伴っている[2)]。

(1) スワヒリ語

a. Juma　a-li-u-a　mbwa　（能動文）
ジュマ　3s-PAST-殺す-F　犬
「ジュマが犬を殺した」

b. Mbwa　a-li-u-aw-a　na　Juma　（受動文）
犬　3s-PAST-殺す-PASS-F　by　ジュマ
「犬がジュマに殺された」

バンバラ語の受動文では、(2) のように、能動文の目的語が主語になる変化は見られるが、動詞の形態は変化せず、能動文と同じ形のままである。

[1)] 本件研究は、2016-18 年度科学研究費助成事業（基盤（C））「ニジェール・コンゴ語族における動詞構造の形態・統語論比較研究」（課題番号 16K02672、研究代表：小森淳子）の学術研究助成基金助成金を受けておこなったものである。なお、本稿は、日本アフリカ学会第 55 回学術大会（2018 年 5 月 27 日、北海道大学）にて発表した「バンバラ語の動詞の「他動性」に関する考察―他動詞と自動詞を分けるもの」の内容を発展させたものである。

[2)] 本稿のデータは、出典のない限り筆者の収集したものである。データの表記は、それぞれの言語の正書法や出典の表記法によるが、ヨルバ語については、正書法ではなく、音声表記に近い形で示してある。

本稿で用いる略号は以下の通りである。1/2/3 + s/pl: person+singular/plural, DEF: Definite, F: Final vowel, IMPS: Impersonal subject, NEG: Negative, NMZ: Nominalizer, PASS: Passive, PAST: Past, PERF: Perfective, PP: Postposition, PRES: Present.

(2)a.　Dònso　bɛ́　jàra　fàga　（能動文）

猟師　PRES　ライオン　殺す

「猟師がライオンを殺す」

b.　Jàra　bɛ́　fàga　dònso　fɛ　（受動文）

ライオン　PRES　殺す　猟師　PP.by

「ライオンが猟師に殺される」

なぜバンバラ語でこのような「受動文」が可能になるのかを、バンバラ語の動詞の分析、特に他動詞と自動詞が同形である動詞の統語特徴と、自動詞の意味と名詞句の関係から考察する。さらに、バンバラ語の自動詞の特徴について明らかにした上で、マンデ語派、グル語派特有の形態・統語特徴について、通時的変化を視野にいれて考察する。

１．バンバラ語の統語特徴

まず、バンバラ語の基本的な統語特徴をみておく。バンバラ語の動詞は、同じ形で他動詞にも自動詞にも用いられる、いわゆる「自他交替」を示す動詞が多く、目的語を伴う場合には他動詞として、目的語を伴わない場合は自動詞として機能している。基本語順は、目的語が動詞の前にくる SOV 語順であり、主語の後ろに時制・相・否定などを表わす語（「助動詞」(A) と呼んでおく）がきて、SAOV という語順になる[3)]。名詞は前置詞ではなく、後置詞をとる。自動詞と共起する後置詞句 (X)（たとえば、「行く」という動詞の目的地を表す語句）は動詞の後にきて、SAVX の語順になる。

助動詞には、現在、完了、未来、状態を表す肯定形・否定形があるが、完了の肯定の助動詞だけ、他動詞と自動詞で形が異なる。その他の助動詞は同じ形である。たとえば、現在の肯定の助動詞は bɛ́ であるが、下の（3）、（4）のように、他動詞文、自動詞文とも同じ形である。

(3) An　bɛ́　bámanankan　kàlan　（他動詞文）

1pl　PRES　バンバラ語　勉強する

「私たちはバンバラ語を勉強する」

[3)] A と V が離れていることから ‘split predicate syntax’ と呼ばれるこの語順は、マンデ語派の特徴として知られている（Kastenholz 2003）。

(4) N　bɛ́　táa　dùgu　kɔnɔ　（自動詞文）

1s　PRES　行く　町　PP.into

「私は町に行く」

一方、完了の肯定の助動詞は、他動詞文では yé であるが、自動詞文では、接辞 -ra が動詞の後につく[4)]。

(5) An　yé　jɛ́gɛ　mìnɛ　（他動詞文）

1pl　PERF　魚　取る

「私たちは魚をとった」

(6) N　táa-ra　dùgu　kɔnɔ　（自動詞文）

1s　行く-PERF　町　PP.into

「私は町に行った」

ただし、完了の否定の助動詞 má は、他動詞、自動詞どちらの場合でも同じ形で、主語のうしろにくる。

(7) An　má　jɛ́gɛ　mìnɛ　（他動詞文）

1pl　NEG.PERF　魚　取る

「私たちは魚をとらなかった」

(8) N　má　táa　dùgu　kɔnɔ　（自動詞文）

1s　NEG.PERF　行く　町　PP.into

「私は町に行かなかった」

以上のように、バンバラ語では、統語的に目的語の有無によって、他動詞文、自動詞文が区別され、また、完了の肯定の助動詞のみ、他動詞と自動詞で異なる形が用いられる。

[4)] 接辞 -ra は動詞によって音韻変化する。鼻音をもつ動詞では -na, l, r をもつ動詞では -la になる。例：táa「行く」＞ táa-ra「行った」、sà「死ぬ」＞ sà-ra「死んだ」、sɔ̀n「同意する」＞ sɔ̀n-na「同意した」、nà「来る」＞ nà-na「来た」、kúma「話す」＞ kúma-na「話した」、bòli「走る／逃げる」＞ bòli-la「走った／逃げた」、wúli「立つ」＞ wúli-la「立った」。

２．バンバラ語の自他交替を示す動詞

上にも述べたように、バンバラ語では、同形で他動詞にも自動詞にも用いられる自他交替を示す動詞が多いが、このような動詞は英語などでもみられる。英語の break（壊す／壊れる）、burn（燃やす／燃える）、open（開ける／開く）、close（閉める／閉まる）、boil（沸かす／沸く）、sink（沈める／沈む）、float（浮かべる／浮く）などの動詞は、他動詞にも自動詞にもなり、動作を受ける対象（theme）は、たとえば下の（9）の ‘the vase’ のように、他動詞の目的語として、また自動詞の主語としてあらわれ得る。

(9)a.　He broke the vase.　「彼は花瓶を割った」　（他動詞文）
　b.　The vase broke.　「花瓶が割れた」　（自動詞文）

ヨルバ語（ニジェール・コンゴ語族、ベヌエ・コンゴ語派、ナイジェリア）も、動詞は形態変化に乏しく、自他交替を示す動詞が多い。fɔ́（壊す／壊れる）、gé（切る／切れる）、gbɛ（乾かす／乾く）、ya（裂く／裂ける）、ʃí（開ける／開く）など、対象の変化を表す動詞が他動詞にも自動詞にも用いられる（基本語順は SVO である）。

(10) ヨルバ語
　a.　ó　ʃí　ìlɛ̀kùn　（他動詞文）
　　3s　開ける　ドア
　　「彼はドアを開けた」
　b.　ìlɛ̀kùn　yìí　ʃí　（自動詞文）
　　ドア　この　開く
　　「このドアは開いている」

バンバラ語でも、対象の変化を表す動詞に、同じような自他交替がみられる。

(11)a.　À　yé　dàga　cì　（他動詞文）
　　3s　PERF　つぼ　割る
　　「彼はつぼを割った」

b. Dàga　cì-ra　（自動詞文）

つぼ　割れる-PERF

「つぼが割れた」

(12)a. À　yé　jíri　jèni　（他動詞文）

3s　PERF　木　焼く

「彼は木を焼いた」

b. Jíri　jèni-na　（自動詞文）

木　焼ける-PERF

「木が焼けた」

対象の変化を表す動詞で、このような交替を示す動詞は「能格動詞」（ergative verb）と呼ばれる（影山 2001:15）が、英語やヨルバ語などでは自他交替を示すのは能格動詞に限られる。一方、バンバラ語では能格動詞だけでなく、「話す」や「食べる」、「飲む」といった動作を表す動詞（動作動詞）においても、自他交替が可能である。下の（13）～（15）の例では、それぞれ「話す」や「食べる」、「飲む」という動作動詞の対象が、a. では他動詞の目的語として、b. では自動詞の主語としてあらわれている。

(13)a. N　bɛ́　bámanankan　fɔ́　（他動詞文）

1s　PRES　バンバラ語　話す

「私はバンバラ語を話す」

b. Bámanankan　bɛ́　fɔ́　Mali　la　（自動詞文）

バンバラ語　PRES　話す　マリ　PP.at

「バンバラ語はマリで話される」

(14)a. Nìn　cɛ̀　yé　sògo　dúmu　（他動詞文）

この　男　PERF　肉　食べる

「この男は肉を食べた」

b. Sògo　dúmu-na　（自動詞文）

肉　食べる- PERF

「肉が食べられた」

(15)a. Wùlu　yé　　jí　　mìn　　（他動詞文）

犬　　PERF　水　　飲む

「犬が水を飲んだ」

b. Jí　mìn-na　　wùlu　fɛ̀　　（自動詞文）

水　飲む- PERF　犬　　PP.by

「水が犬に飲まれた」

それぞれの b. の例では、「受動文」のような訳が当てられることになる。英語では、このような自他交替は不可能であり、このような動作動詞の対象が主語になる場合は、下の（16b）のように、動詞が形態的な変化を伴って、受動文になる。

(16)a. I speak Bambara.　　（他動詞文＝能動文）

b. Bambara is spoken in Mali.　　（受動文）

ヨルバ語においても、動作動詞が自他交替することは不可能であり、また、英語のような典型的な受動文もないので、対象が主語になることはない。ヨルバ語では受動文に相当する文は、いわゆる「非人称受動文」（impersonal passive）という形で表される。これは、他動詞文の主語を「非人称主語」（impersonal subject）にして、受動文に相当する意味を表すものである。下の（17a）は他動詞文、（17b）が「非人称受動文」の例である。

(17)　ヨルバ語

a. ɔlɔ́pàá　pa　olè　náà　　（他動詞文）

警官　　殺す　泥棒　DEF

「警官がその泥棒を殺した」

b. wɔ́n　pa　olè　náà　　（非人称受動文）

IMPS　殺す　泥棒　DEF

「その泥棒は殺された」

ヨルバ語の非人称受動文では、主語が非人称主語（wɔ́n）になり、動作を受ける対象（ここでは ‘olè náà’「その泥棒」）は目的語の位置にとどまっている。つまり、動詞は他動詞

のままである。一方、バンバラ語の（13b）～（15b）では、動作を受ける対象が主語になり、動詞は明らかに自動詞として機能している。つまり、バンバラ語では、対象の変化を表す能格動詞のみならず、動作動詞まで自他交替が可能ということである。

ではなぜ、バンバラ語ではこのような自他交替が可能なのであろうか。次の節では、バンバラ語の自動詞の特徴について詳しくみていく。

３．バンバラ語の自動詞の特徴

バンバラ語では、動作動詞も自他交替が可能であり、対象が主語となって、自動詞として用いられる時に、「受動文」に相当する意味をあらわすことになる。しかし、動作の対象が人間の場合、「受動」ではなく「能動」に解釈されるのではないかという疑問が生じる。たとえば、下の（18）のように、動詞「洗う」の対象が「少女」であるような場合、（18b）のように、「少女」が主語になる自動詞文では、「少女」が「洗う」の動作主（agent）とは解釈されないのだろうか。

(18)a. Mùso bɛ́ dénnin kò （他動詞文） (Kastenholz 1998:105)
女の人 PRES 少女 洗う
「女の人が少女を洗う」

b. Dénnin bɛ́ kò （自動詞文）
少女 PRES 洗う
「少女が洗われる／*少女が洗う」

（18b）は「少女が洗われる」という受動の意味しかなく、「少女が洗う」という能動の意味にはならない。能動の意味を表す場合は、「洗う」を動名詞形[5]にして、下の（19）のように表す（動作主が主語であるこのような能動の文を、ここでは「動作主自動詞文」と呼んでおく）。

---

[5] 動名詞形は、動詞に名詞化接尾辞 -li をつけて作る。動詞の末尾の音節に鼻音がある場合は -ni になる。例：kò「洗う」＞ kò-li「洗うこと」、tóbi「料理する」＞ tóbi-li「料理すること」、sɛ́ben「書く」＞ sɛ́ben-ni「書くこと」、dúmu「食べる」＞ dúmu-ni「食べること」。動詞と動名詞形が同じ形である場合もある。例：kàlan / kàlan「勉強する／勉強」、sɛ̀nɛ / sɛ̀nɛ「耕作する／耕作」、mìn / mìn「飲む／飲むこと」。

(19)　Dénnin　bɛ́　　kò-li　　la　　（動作主自動詞文）

少女　　PRES　洗う-NMZ　PP.at

「少女が洗っている（入浴している）」

（19）の bɛ́ は助動詞としてではなく、（英語の Be 動詞のような）動詞として機能していることになる。bɛ́ は助動詞として用いられる他に、存在を表す動詞として用いられるが、その典型的な例は（20）のような例である。

(20)a.　Sìgilan　bɛ́　　yàn

椅子　　PRES　ここ

「椅子はここにある」

b.　Kàràmɔgɔ　bɛ́　　kàlànso　la

先生　　PRES　教室　　PP.at

「先生は教室にいる」

つまり、（19）のような「動作主自動詞文」は、存在文と同じ構文であり、（20b）の後置詞を伴う文の構造と同じである。

さらに、「動作主自動詞文」は、軽動詞 kɛ́「する」を用いて、他動詞文と同じ構造で表されることもある。下の（21a）は tóbi「料理する」という動詞を用いた他動詞文、（21b）は「動作主自動詞文」の例である。

(21)a.　Mùso　bɛ́　　tò　　tóbi　　（他動詞文）

女の人　PRES　練り粥　料理する

「女の人が練り粥を料理する」

b.　Mùso　bɛ́　　tóbi-li　　kɛ́　　（動作主自動詞文）

女の人　PRES　料理する-NMZ　する

「女の人が料理をする」

（21b）は、意味的には、動作主の行為を表す「動作主自動詞文」であるが、統語的には

tóbi-li「料理すること」を目的語にとる他動詞文の構造と同じである[6)]。

tóbi「料理する」も自他交替を示す動詞であるが、前述のように、自動詞として用いられる時は、対象が主語になる場合だけである。この場合、下の（22）のように、任意に動作主を後置詞句で表すことも可能である。

(22) Tò　bɛ́　tóbi　(mùso　fɛ̀)　（自動詞文＝受動文）
練り粥　PRES　料理する　女の人　PP.by
「練り粥が（女の人によって）料理される」

（3）の kàlan「勉強する」、（14）の dúmu「食べる」の「動作主自動詞文」の例もみておこう。kàlan は動詞、名詞とも同じ形であり、名詞化接尾辞 -li はつかない。

(23)a. An　bɛ́　bámanankan　kàlan　(= 3)　（他動詞文）
1pl　PRES　バンバラ語　勉強する
「私たちはバンバラ語を勉強する」
b. An　bɛ́　kàlan　kɛ́　（動作主自動詞文）
1pl　PRES　勉強　する
「私たちは勉強する」
(24)a. Nìn　cɛ̀　yé　sògo　dúmu　(=14a)　（他動詞文）
この　男　PERF　肉　食べる
「この男は肉を食べた」
b. Nìn　cɛ̀　yé　dúmu-ni　kɛ́　（動作主自動詞文）
この　男　PERF　食べる-NMZ　する
「この男は食べた（食事をした）」

以上のように、自他交替を示す動詞が自動詞として用いられる時には、対象しか主語になることができず、動作主は主語になれない。つまり、自動詞として用いられる時の主語

[6)]（19）の後置詞 la を用いる構文と、（21b）の軽動詞 kɛ́ を用いる構文は、前者が「進行」の意味を表し、後者は単に「現在」を表すと考えられるが、すべての例で両方の構文が可能かどうかは未検証である。また、現在進行を表す構文は他にもあるため、これらの構文の違いやアスペクトとの関係などについては、今後の検討課題としたい。

は、必ず対象であるので、「受動文」の読みが可能になるといえる。

バンバラ語では実際のところ、他動詞はすべて自動詞として用いることができ、自他交替を示す。自動詞としてしか用いられない、あるいは自動詞として用いられるのが普通である動詞があるが、それらは存在や移動、身体動作や感情を表す動詞である。

(25) 存在を表す動詞

bɛ́「いる・ある」、tó「留まる」、fàma「長期不在である」、tìlen「一日を過ごす」、sì「夜を過ごす」、sà「死ぬ」など

(26) 移動を表す動詞

táa「行く」、nà「来る」、bɔ́「出る」、sé「到着する」、sègin「戻る」、dòn「入る」など

(27) 身体動作や感情を表す動詞

sùnɔgɔ「寝る」、gɔ̀rɔndɔ「いびきをかく」、wúli「立つ」、séli「祈る」、síran「恐れる」、bòli「走る」、kàsi「泣く」、ɲìnɛ「忘れる」、sɔ̀n「同意する」など

以上のような意味を表す動詞の主語は、一般には、動作主ではなく、対象や経験者（experiencer）であると考えられる。自他交替を示す動詞が自動詞として用いられる時には、主語が必ず対象であることからも、バンバラ語の自動詞の主語は動作主以外である、つまり、動作主であってはならない、ということができる。

自動詞の主語が動作主であってはならないというこの原則は、通言語的にみられる一般的な自動詞の分類が、バンバラ語にはあてはまらないということを示す。

一般に、自動詞には、動作主の意図的な行為を表す動詞と、存在や移動、状態の変化などを表す動詞の 2 種類があると考えられる[7]。前者は、「働く、遊ぶ、踊る、暴れる」や ‘work, dance, run, talk, shout, laugh’ などのように、主語が動作主であるような動詞で、「非能格動詞」（unergative verb）と呼ばれ、後者は、「育つ、流れる、しおれる、さびる」や ‘exist, happen, fall, arrive, remain, desapper’ などのように、主語が動作主以外の意味役割を示す動詞で、「非対格動詞」（unaccusative verb）と呼ばれる（影山 1993:43）。

動作主が自動詞の主語になり得ないということは、バンバラ語には「非能格動詞」がな

[7] 自動詞に 2 種類あるという現象は ‘split intransitivity’ として知られている。主語の意味役割や、形態的、統語的な特徴によって区別される。詳細は Melran (1985), Van Valin (1990) など参照のこと。

いということになる。それゆえ、他言語で「非能格動詞」が表すような文は、バンバラ語では、「動作主自動詞文」のような、実際には、存在文や他動詞文と同じ構造をもつ文でしか表すことができないのである。

「自動詞の中には、他動詞の目的語が動詞に対してもつのと同じ関係をもつ唯一の項をもつものが存在する」というのが「非対格仮説」（Unaccusative Hypothesis）であるが（郡司 1997:109）、非対格仮説によると、「非対格動詞」が主語としてとる項と、他動詞が目的語としてとる項が同じ意味関係（対象）を示している。そして、これらの項が動詞にとっての「内項」であり、他動詞の主語や「非能格動詞」の主語は「外項」となる（Levin & Rappaport 1995）。バンバラ語には「非能格動詞」がないので、外項のみを唯一の項としてとる動詞がない、ということになる。つまり、バンバラ語では、すべての動詞が内項をとり、それが他動詞の時は目的語として、自動詞の時は主語として表れるのであり、このような特徴が、バンバラ語の変則的にみえる「受動文」を可能していると考えられる。

４．地域的特徴としての自他交替の現象と発展

同じ動詞が他動詞にも自動詞にも用いられる自他交替の現象が、能格動詞のみならず、動作動詞にまでみられることによって、変則的な「受動文」を可能にしていることをみたが、これはバンバラ語に限ったことではなく、広くマンデ語派にみられる特徴であり、また東に隣接するグル語派の諸言語にもみられる特徴である。下の（28）は、グル語派のナウドゥム語（Nawdm）の自他交替の例である。

(28) ナウドゥム語（ニジェール・コンゴ語族、グル語派、トーゴ） (Watters 2000:211)

a. nídbá　nyìrá　dáám　wèém　（他動詞文）
　人々　飲む:PERF　酒　すばやく
　「人々がすばやく酒を飲んだ」

b. dáám　nyìrá　wèém　（自動詞文）
　酒　飲む:PERF　すばやく
　「酒がすばやく飲まれた」

動詞は同じ形（nyìrá）で、動作主が主語である他動詞文と、対象が主語である自動詞文の交替がみられる。(28b) の自動詞文が受動的な意味を表しているのは、wèém「すばやく」

という行為を修飾する副詞があり、動作主を含意していることからも分かる。

グル語派の他の言語では、このような交替が、対象が「無生物」の場合は可能であるが、人間などの「有生物」の場合は不可能である場合がある。下の（29）のディタンマリ語の例は、対象が無生物の「モロコシ」で、（29b）の自動詞文が「受動」の意味を表している。

(29) ディタンマリ語（グル語派、ベナン・トーゴ）(Reineke & Miehe 2005: 343)

a. ḍābírā　pwōtá　kuyòòkù　（他動詞文）

子ども　叩く:PERF　モロコシ

「子どもがモロコシを叩いた」

b. kuyòòkù　pwōtá　（自動詞文）

モロコシ　叩く:PERF

「モロコシが叩かれた」

同じ動詞 pwōtá「叩く」でも、対象が有生物の場合は、自動詞の主語となっても、「受動」の意味を表さない。下の（30）の例は、対象が有生物の「子ども」である。

(30) ディタンマリ語 (Reineke & Miehe 2005: 343-4)

a. cītá　pwōtá　ḍābírā　（他動詞文）

父親　叩く:PERF　子ども

「父親が子どもを叩いた」

b. ḍābírā　pwōtá　（自動詞文）

子ども　叩く:PERF

「*子どもが叩かれた／子どもが叩いた」

ただし、（30b）は非文ではなく、「子どもが叩いた」という「能動」の意味では可能であり、ディタンマリ語は、動作主を主語にとる自動詞が可能であることが分かる[8)]。

動作動詞の自他交替に関してみると、ディタンマリ語は対象の「有生性」によって制限

[8)] （30b）は「動作主を主語にとる自動詞」（unergative verb）というより、「目的語が脱落した他動詞」（antipassive construction）ではないかと考えられるが、いずれにしても、ディタンマリ語では、動作主を唯一の項としてとる構文が可能だということである。

があり、バンバラ語には制限がないといえる。それは、バンバラ語には非能格動詞がないことが関係しているが、ディタンマリ語では、少なくとも動作主が動詞の唯一の項として主語になれるので、動作動詞の自他交替に有生性の制限があると考えられる。

動作動詞に自他交替がみられるのは、マンデ語派とグル語派の地域的な特徴であり、独自に発展してきたと考えられている（Reineke & Miehe 2005:357）。発展の進度というものを考えてみると、ディタンマリ語のような制限がある交替から、バンバラ語のような制限のない交替へと発展していったのではないかと推測される。

また、バンバラ語では、このような自動詞が「受動」の意味を表す場合、（2b）や（15b）、（22）でみたように、動作主を付加詞として加えることができる。動作主は後置詞 fɛ̀ をとって動詞の後におかれる。下に例を再掲しておく。

(31)a. Jàra bɛ́ fàga dònso fɛ̀ （= 2b）
ライオン PRES 殺す 猟師 PP.by
「ライオンが猟師に殺される」

b. Jí mìn-na wùlu fɛ̀ （= 15b）
水 飲む- PERF 犬 PP.by
「水が犬に飲まれた」

c. Tò bɛ́ tóbi mùso fɛ̀ （= 22 ）
練り粥 PRES 料理する 女の人 PP.by
「練り粥が女の人によって料理される」

一方、同じマンデ語派の言語でも、動作主を付加詞として加えることができない言語もある。マンディンカ語では、下の（32b）のような自動詞文には、動作主を表す付加詞を加えることはできないという（Creissels 2015:233）。

(32) マンディンカ語（マンデ語派、ガンビア・セネガル）(Creissels 2015:233)

a. kambaan-óo ye nás-óo feereetoo-bóŋ kolóŋ-o kóno （他動詞文）
少年-DEF PERF 聖水-DEF 器用に-注ぐ 井戸-DEF PP.in
「その少年はその聖水を井戸の中に器用に注いだ」

b. nás-óo　feereetoo-bón-tá　kolóŋ-o　kóno　（自動詞文）

聖水-DEF　器用に-注ぐ-PERF　井戸-DEF　PP.in

「その聖水は井戸の中に器用に注がれた」

また、ディタンマリ語や他のグル語派の言語でも、このような動作主の付加詞をとることはできない（Reineke & Miehe 2005: 357）。動作主の付加詞を加えることができるということは、その自動詞文が明確に「受動」の意味を表していることになる。動作主の付加詞を加えることができるかできないかという点に関しても、発展の進度という観点からみることができるかもしれない[9]。

このようにしてみると、能格動詞のみならず、動作動詞においても自他交替がみられるという統語的な現象は、地域的な特徴として、マンデ語派から発展してグル語派へと広がり、また、その発展の進度によって、自他交替にかかる制約や動作主の付加詞の有無などの違いが見られるのではないかと考えられる。

５．おわりに

本論文では、変則的にみえる「受動文」から、バンバラ語の自他交替と自動詞の特徴について考察した。バンバラ語では、動作動詞でも自他交替を示し、動作動詞が自動詞として用いられる時に「受動文」のような意味を表すことをみた。これは、動作動詞がとる「対象」（theme）の名詞句が、他動詞文では目的語として、自動詞文では主語として表れることから可能になる現象であるが、バンバラ語の自動詞は、唯一の項として、動作主以外をとるという原則が、この交替を可能にしているといえる。

自動詞は、通言語的には、動作主を主語にとる「非能格動詞」と、動作主以外を主語にとる「非対格動詞」に分けられるが、バンバラ語には非能格動詞がなく、動作主が主語であるような自動詞文は、存在文や軽動詞を用いる他動詞文と同じ構文で表される。動作主が自動詞の主語になれる言語では、ディタンマリ語でみたように、動作動詞の自他交替に

9） マンデ語派では、バンバラ語をはじめとして多くの言語が動作主の付加詞をとることができる一方で、グル語派では、カビエ語（トーゴ・ベナン）など、わずかな言語しかとれないようである（Reineke & Miehe 2005:357）。マンデ語派で動作主の付加詞がとられるようになり、それがグル語派にも広まりつつあると推測できるが、この点についてはさらに調査が必要であり、今後の課題としたい。

制限がかかるが、それは、「対象」が有生物の場合、主語になった時に「動作主」と解釈されてしまうからである。このようにしてみると、動作動詞の自他交替と非能格動詞の存在は強く関連しており、バンバラ語のように、動作動詞の自他交替が完全に文法化されると、非能格動詞が完全に失われると推測され、通時的には、このような方向への発展が、マンデ語派、グル語派の地域的な特徴としてみられるのではないかと考えられる。

「受動文」に相当する文がどのように表されるかを、ニジェール・コンゴ語族全体で概観してみると、スワヒリ語のような動詞の派生形による「典型的」な受動文、ヨルバ語のような非人称主語を用いる「非人称受動文」、そして、バンバラ語のような「受動」の意味を表す自動詞文と、大きく 3 つのタイプに分けることができる（小森 2018）。ニジェール・コンゴ語族全体の歴史的な分布と変化の方向を考えると、動詞の形態は、より孤立語的な形態へと変化しており、統語によって文法関係が表される傾向にある。そうすると、形態変化を伴うスワヒリ語のような「受動文」の類型から、ヨルバ語のような、統語的には他動詞文である「非人称受動文」の類型へ、そして、バンバラ語のような、動作動詞の自他交替によって表される自動詞文の類型へと変化する方向性が推測される。

動作動詞の自他交替という発展に伴って、非能格動詞の消滅や、動作主の付加詞としての出現がみられると考えられるが、これらの現象の間の関係性は推測の域を出ず、今後の検証が必要である。また、推測される変化のあり方や進度は、バンバラ語がかなり進んでいる言語の例であるといえるが、マンデ語派やグル語派の中でも違いがみられ、この変化の方向性を検証するためには、さらに多くの言語の詳細な記述が必要であり、その点についても今後の課題としたい。

参考文献

影山太郎（1993）『文法と語形成』、ひつじ書房.

_____（2001）「自動詞と他動詞の交替」、影山太郎（編）『日英対照　動詞の意味と構文』、大修館書店、pp.12-39.

郡司隆男（1997）「第 3 章　文法基礎概念 2 － 述語と項の関係」、益岡隆志他（編）『言語の科学 5　文法』、岩波書店、pp.79-118.

小森淳子（2018）「ニジェール・コンゴ語族における動詞派生形と「受動文」」、『言語文化研究』44 号，大阪大学大学院言語文化研究科、pp.33-53.

Creissels, Denis (2015) “Valency properties of Mandinka verbs,” in Malchukov, Andrej & Bernard Comrie (eds.) *Valency Classes in the World's Languages* vol.1, Berlin: De Gruyter Mouton, pp.221-259.

Kastenholz, Raimund. 1998. *Grundkurs Bambara (Manding) mit Texten*, Köln: R.Köppe.

_____ 2003. “Auxiliaries, grammaticalization, and word order in Mande”, *Journal of African Languages and Linguistics*, vol. 24-1, pp. 31-53.

Levin, Beth & Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity*, Cambridge: MIT Press.

Merlan, Francesca (1985) “Split intransitivity: Functional oppositions in intransitive inflection,” Nichols, Johanna & Anthony C. Woodbury (eds.) *Grammar Inside and Outside the Clause*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.324-362.

Reineke, Brigitte & Gudrun Miehe (2005) “Diathesis alternation in some Gur languages,” Voeltz, F. K. Erhard (ed.) *Studies in African Linguistic Typol*ogy, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp.337-360.

Van Valin, Robert D., Jr. (1990) “Semantic Parameters of Split Intransitivity,” *Language*, vol.66-2, pp.221-260.

Watters, John R. (2000) “Syntax,” in Heine, Bernd & Derek Nurse (eds.) *African Languages: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.194-230.